

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	森の逍遙 : 文苑
Author(s)	槇の村人
Citation	龍南會雜誌, 109: 39-46
Issue date	1905-01-26
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5783">http://hdl.handle.net/2298/5783</a>
Right	

# 森の逍遙

楨の村人

春の日を囁きしけき森に入りて

趣ある葉にそとくちつけぬ

何とはなしに思ひ乱れて、行く雲の方のみ慕はしき眞晝どき、空想の翼、擴がりゆきて、更に過去の罪ある歴史を想ひ、悲み多き世のさまの果敢なきを慨きては、たとしへもなく人の身の力なきを感じて、只たゞ、燃ゆるは熱き胸のたもひ、裂きて、開きて、此の苦みを解く人あらばと、思ふたふしを、ふと此の森にわけいりぬ。

人の子更らに力なくして、運命の神、あらびに荒らび『機會』といへる袋のなかに、尊くはた聖かるべき『人生』を抛げいれて、水に漬して汚泥となし、山に投じて砂塵を楊げしめ、かくて自然を擾しつゝ、更らに虚空に高くなげうちて、落ち來る『幸福』を劍もて拂へば、袋は無殘紐を切られて、隙より漏るゝあまたの『人生』地に向つて墜ち來るをば利刃をもつて二度三たび、閃光の如く切り拂へば、微塵となりて散ずるもの多く、地に下るはいと稀なり、『人生よ、我が擾したる地に墜ち行け、さらずば我が此の利劍のもとに、爾が力なき身を微塵となせ！』『機會』の袋は虚空に飛びて、舞ふやひら／＼、風に吹かれて本來空………。かくまで驕る運命の神をば、いかにもして服せむもの

と、難きになやむ折ふしを、ふと此の森にわけいりぬ。

文

露ある葉ごとに生命の光ありて、生々の氣は野にみちわたりぬ。見よ、自然は情の人をして想の人たらしむ。悶を吸ひて惱の聲あぐる青春の子は、寂たる森の靈氣にふれて、生命のさらに新たなるを味へ。希望はまた新たなる希望をうめば、しづめるまなざし熱火と化して、昂れる眉の木のきは、これ奮闘のきざしなり、理性、向上の一路にむかへば、胸は理想の光に燃ね、運命の神を招きよせて、たのが天職の導者たらしめんとす。

叢の蟲、ひびき聲音にたごろきて飛びたてば、かなたに鳥の音もきこゆ、驚きしもの、啼けるもの、皆其の能をつくしつゝ、たゞ飛び、たゞ啼くさまを見なば、大なるもの彼にありて、懊惱の苦は、只太界のすさびなるを知らむ、自然と合して始めて人の聖きを知るべく、惱を去りて、始めて人の高きを知るべし。

風さと吹きて、松にさとしの響あり、小笹、熊笹舞ひごよみて、煩ひの跡示したるも唯しばし、世はまた、もとの寂寞にかへりて、人に微妙の静思を傳ふ。

叢の暗きが中に詛の聲あり。

寂たる眞夜中、浮世の戦に疲れ果てたる人の子に、愛と慰安とを與ふる夜の帷の隙よりもれて、うつるは平和と時の刻、七星空に蕭まりて、黃道十二宮 微かに地上を照らしゆけば、織駱たこらす、

雲動かず。さても此の夜、此の静けさを、微かにされど確かにやぶるは詛の聲なり。『聴けや、潜かに！唯だ太平に鼓腹して、遊惰安佚に桃源の夢をむさばる張四季三の輩。文明の利器を真向にかざしつゝ、『科擧』の楯に身を防ぎて、詩人の領に攻めいらんとする者、人道の総てを破壊して、世を黄金の魔淵に沈めんとする者、信仰の神聖を瀆して、濫りに無神の論をなす者、皆來つて我が脚下に俯せよ、爾が行ふ處、爾が説く處の総ては、世の何物をも混濁せしめんには、あまりに露骨なり、あまりに正直なり。宇宙の眞を解せんとして、獨り默思の境に入る哲學者よ、自然の美を讚しては、人生の何物にも代へんとする若き詩人よ、墮落の淵に溺れんとする弱き人の子を救ふ道德家よ、総ての物、皆神の意志によりて、活躍すとなせる宗教家よ、爾も亦來て我が脚下に俯せよ！我が爲す處、爾が言ふ處の総ては、世の何物をも清淨ならしめんには、あまりに神秘なり、あまりに幽玄なり。

萬有は萬有なり、自然は自然なり。さらに此の間些の意義あるにあらざるなり。是を曲解して宗教となり、詩となり、道德となり、教育となる。切初の昔を顧みて、歴史のあとを尋ね行けば、其の源は深きにあらず。

博愛の教によりて、猶太の野にたちし西の聖、基督の訓も、印度の山に一視同仁の基をたてし釋迦の教も、今果た何の効ありや、信仰の自由を希ひて、新たなる地に己が理想郷を建てんとしたる清教徒の子孫は、今や黄金萬能の魔劍を掲げて、社會の秩序を擾したるに非ずや。釋迦の教を傳べて、慈悲の本願を果さんと欲したる日本現時の宗教界に、慨く可きもの、嘆ず可きものなからずや。百萬

佛信徒を擁護して、彌陀の餘光を説きては、一向專念の教を一切衆生に布きたる親鸞の子孫は、三門毘周して来世澆季の聲、四方に起りつゝあるに非ずや。仁義の二字に中華の光を耀かさんとしたる孔孟の國も、奈果た何處にか其の面影を認む可き。四億の民は未だ陋習の規範を脱する能はず、箇人簡利害を省みるに急にして、國家的大結合の力なきを、祖禋すでは殆うけれども、一人の立つて天下に義を稱ぶる者なきに非ずや。

歴史の頁を繰る毎に、爾の心は不安の念に満たざるや、奸譎、作偽、惡徳の代表者たる、所謂英雄てぶ者の爭論、殺戮の事蹟を慕うて、心を功名の雲にはざる虚榮に憧るゝ若き子よ、爾が惱中、已に魔神の侵畧にあひて、自己の存在は、野心の幕に覆はれたるを知らざるや。同じく「人」の天職を專けて、等しき機關、等しき地位を授かりて、生れいでたる人の身の、階級制の許に、其の自由意志をば束縛するさへ不平等なるに、是を殺した殺させて、家國民人の安寧を擾す所謂英雄の蹟に倣はんとする若き子よ、高きに登りて、英雄の末路のいかなるかを見よ、霸圖徒らに青史に載れども、隠れたる他面は確かに苦惱の大なるものなりき。さらば人生の何物をも犠牲になして、人道を無視し、宗教を排濟し、沒理想の行爲を敢てして、自ら得々たる徒よ、爾は人類をして萬有の覇者たらしめんの概なきや、宇宙を一貫して眞理なる向上主義に矛盾したる言動を敢てして、尙ほ人類生存の目的を達せんとするや。

謬なり矣、爾の頭三寸動かば、人は禽獸に近づく事三寸なり。止ぬる哉、浮世の塵芥を伍して大差なき醉生夢死の輩、寧ろ進化の歸路を辿りて、唯だ全一の組織となし、更に歩を踏みて、新たなる

向上の一路に就かば、庶幾くは以て人類総ての幸福ならん』。

叫びながらにあらはれたる、詛の神は物すごとくも、天に向つて大氣を吐けば、西維の礎、うごきゆらめき、たごろ、たごろの音凄まじく、黒雲ちぎれて星散乱、嵐叫びて巖をどばし、河水いかりて逆流滔々、百鳥啼いて淵に陥り百獸奔りて峽谷に満ち、天地の光景轉た、慘憺たり。

天の一方、紫雲の中より、銀鈴振りつゞ、あらはれ来る光明の神あり。八坐の星宿あたりを護りて光耀々、威凛々、桂を把りて一度はらへば、沃雲散りて、雲收まり、濁流すみて月迢々。

『詛の聲よしばしもたせ！怒れる熱火、地軸を焼くとも、人世の波はあく可からず、大自然の懷に抱かれたる『人』の世を搔き紊して、世を渾沌の昔に歸し、なほきにかへれと叫ぶとも、無始より無終に渡るタイムに比せば、短かるべき五十年の生涯を送る人の子の、いかでさる願のかなふべしやは。進化の眞を認めたる、慧しき人の子の、後の榮を樂みて、いま暫くは詛はされ！、人は神に非ず、されども亦禽獸にもあらず、向上主義を標榜しつゞ、進化の原に反するは、維れ煩悶と、生活と、情との三つが相結ばりて、解けて、碎けて陥りたる力なき子の謬なれども、正すにかたき事やある。さらば語らむ示さむ』と、銀鈴三度、打ちふれば自然はまたも元の姿、星は點々、森肅々。

静まれ詛、もたせよ嵐。物、錯はりて絲の如く、四方に張つて社會をなせども、歸一の絲は整然たり。乱れ乱るる尾花の振りの、西に東に舞ひごよめども、根は一條の塊なり、維なり。根幹ありて枝葉あり、枝葉の精は集りて、始めて根幹の基を固くす。枝は人なり、幹は神なり、神人にあらざれ

さも、人また神となるを得べし。『あらゆる非生の間に在りて、獨り生ある靈』を有つは、人より外に見るを得べきや、濁るといふも其は只しばし、やがては全一の白きに返りて『衡平を保ちて兩手に肉と靈とを運ばむ、人たのく心あり、靈ありて、六合にわたる眼目の映する鏡なり、心たのく愛あり、靈たのく天あり、たのく生れ、たのく死し、たのく長じ、たのく衰へ、内に光満ち、内に暗溢る』溢れし暗も光に消されて、人と自然の合一ならむ、自然を活かし、自然に聽きて、自らを悔い、自らを改むる能を有つ、人より外に見るを得べきや。地球の上の生物を征するも、自然の力を利用するもの、有てる靈をば一層の靈に進めむとするものは、人より外にまたあるべしや。濁りたる者、穢れし者、惡徳、虛榮の内に住して、小我に己が満足を買はむとする者、其は人ならぬ人類なり。傲りの影、貪りの闇、暗きに潜みて世を紊るは、人でふ價値のなきものなり、仰いで天の高きを望めば、なをさに歸れの啓示は著るく、自然兒たれの默示は遠の野に溢れたり。

静まれ詛、もだせよ嵐。人ならぬ人類の迹をのみ見て、靈ある人をあやまる勿れ。劫初このかた、渾沌のよさし尙ほ盡すして、塵界の面、只濁水の逆捲くあれど、想の子一たび振ひ動けば、世は曙の色にかへりて、浮雲いつしか形を失ひ、もろくの影、光に消ねゆき、希望の色は天地に漲きり。浮薄の流、淵に沈みて、明しあしたの空の榮。詩といふものも人作れり、科學といふも人作れり作りしものを壊つとて、人各の權の内にて、自然を紊るは許しがたきも、作りしものに爾怒るは、爾の權を紊るものなり。爾ルーツを革命者となすか、爾ニーツを破壊者となすか、二十世紀の昔

にかへりて、只山上の垂訓をもて、総ての眞理となすものなるか、向上の理を認めながら、瞭なる眞理を認め得ざるか。

静まれ詛、もだせよ嵐。地上の穢は去らざれども、見よや、曙光の影にうつし出でたる、玲瓏玉を欺く芙蓉峯、千萬の精、千萬の靈、炎となりて、此に集り、玉露金華の精をあほれば、正義に據らむ氣はいや高く、日本國の光耀々、一度あほれば鷄林慄き、二度あほれば遼東潰れ、無道、背信の猛鷲を却けて、文明の私せざる、正義の偏せざるを宇内に示して、若き帝國の向ふ所、宗教の腐敗せる、社會秩序の紊乱せる、制度典章の備らざるを、裏面より摘發して、二十世紀の新光は、形式美に走れる、西歐の天に非ずして、過去の世紀に、其の多くを知られざりし、極東新進の一國によりて發輝せられむ。仰げば峯のかなたに當りて、軋々たる微音は、悠久の彼蒼に傳はり、醒めよと響き、醒ませと鳴りて、豫言者振りの山の姿、尊からずや千秋冬を戴く玉芙蓉!!!

何處にか銃の音、聞え來りぬ。沈める大氣を通じて、犬のこゑ、かすかに山のかなたより傳はり來りて、啼く鳥の聲、ひくとなりぬ、突然、小川に影をたとしつゝ、舞ひ來りし鳩の、羽ばたき軽く梢にとまりて、あたり心兼ねたらん眼の閃き、友ほしげにク、と啼きしが、やがて、西へと飛びゆきぬ。

限りなき空想の翼は、日の傾ぐにしたがひて收まり行き、再び塵の世の子たらざる可きかに思ひ及びて、心疎然として戦きぬ、されども、泥を去らんとせば、其の泥に入らざる可からざるを思ひて、



心はまた和ぎのきよきに歸りぬ。力ある者は優者なり、運命を壓くものは優者なり、優者は人を導きて、新たなる希望の光に浴せしむ、萬物は、世を服し、自然を活かして廓清、向上の責をつくす優者の前に雌伏す、優者の命するすべての要求は、弱者は是に服せざる可からず、我れ願くば優者となりて、己が理想の世を作らなむ。

新体詩

天門破壊の歌

内田夕闇

(天門今ぞ)

くづれてゆくよ

天門今ぞ

くづれてゆくよ

呼ぶよと見ればあら不思議

夕雲匂ふ間より

夏日珊瑚のどくること

深紅の色にかがやきて

高くそびえし天門の

扉はやぶれうづまくは

蒼顔の民野に立ちて